

## 歌枕「三笠山」の形成と発展

辻 純子

三笠山は、『能因歌枕』に「山をよまば、吉野山、あさくら山、みかさ山、たつたやまなどよむべし。」(1)、また、藤原清輔の『和歌初学抄』所名では「同(山城) みかさ山 同上、カサニソフ」とある。「カサニソフ」とは、歌に詠まれる地名・三笠山に観念付けがなされていることを示すものである。

三笠山は現在の奈良県奈良市にあり、春日大社後方に位置する。

『日本歴史地名大系30奈良県の地名』では、

御蓋山(三笠山) 春日山の西峰で、蓋(笠)に似ていることからその名がある。(中略)西麓に春日大社、山頂に本宮神社(浮雲宮)が鎮座。標高二八三メートル。初見は「続日本紀」養老元年(七一七)二月一日条。(中略)天平勝宝八年(七五六)の東大寺山堺四至図(正倉院蔵)には今日の春日大社の前身であった「神地」と、春日山にあたる「南北渡山峯」との間に、円錐形の美しい山を描いて「御蓋山」と注記し、同図端書にも「三笠山」と記している。「東大寺要録」によると、東大寺創建の頃この辺りが山金里とよばれ、御蓋山には安倍氏の社が創設されていたことが知られるが、その所在は未詳。(以下略)(2)

と記す。次に、春日山についても同書でみておく。

春日山 奈良市街地東方にあり、御蓋山東に台形状を呈す。(中略)主峰花山(四九八メートル)を中心に、南に香山(高山)西に御蓋山があり、これらを一括して古く春日山と称したと思われる。(中略)春日山南麓では遣唐使が天神地祇を祀り(続日本紀)、御蓋山西麓には春日大社が鎮祭され、香山は水神の守る山として崇敬された。春日山・御蓋山は神山として狩猟・伐採が禁じられ、現在まで原生林の植生を残し、ルーミスシジミ・鹿・ナギなどの繁

殖を容易ならしめている。(以下略)

三笠山の名称は美しくカサに似る山容から付き、古くは春日山の一峰と見なされていたらしい。そして、東大寺創建の頃には安倍氏の社が創設されていたという。また、三笠山は春日山の西に突き出ており、春日神社が西麓にある山で、更にその西側には奈良の京・平城京が位置していた。

この三笠山を唐の国で阿倍仲麻呂が詠んだといわれる歌がある。この歌は『古今和歌集』『古今和歌六帖』といった歌集、『土佐日記』(初句・青海原)『古本説話集』『今昔物語集』等に採録されている。次の引用は『古今集』からである。

もろこしにて月を見てよみける 安倍仲麻呂

四六あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも  
この歌は、むかしなかもるをもろこしにものならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへてかへりまうでござりけるを、このくにより又つかひまかりたりけるにたぐひまうできなむとていでたりけるに、めいしうといふ所のうみべにてかのくにの人むまのはなむけしけり、よるになりて月のいとおもしろくさいでたりけるを見てよめるとなむかたりつたふる (3)

左注によると、明州の海辺においての送別の宴で詠まれたものということになる(4)。三六年ぶりに故国に帰る仲麻呂は、三笠山の月に思いを馳せた。唐国で月を見て三笠山を思い浮かべるほど、三笠山と月には深い結び付きがあったのだろう、と私は考えていた。それ故に三笠山を「月の名所」と考えていたのだが、はたして「三笠山」月の名所」のイメージは、当時、成り立っていたのであろうか。

人々が心に抱いていた三笠山像を探るため、『万葉集』及び八代集の三笠山詠歌をみていきたい。また、歌枕・三笠山の形成についても考えていきたいと思う。

# 一・阿倍仲麻呂の三笠山詠歌

では、まず、阿倍仲麻呂歌を考える。阿倍仲麻呂は、靈龜二年(七二六)吉備真備らと共に遣唐留学生に選ばれ翌年入唐。名を朝衡と改め、官人として唐朝に使えて玄宗の厚遇を受けたが、天平勝宝五年(七五五)遣唐大使藤原清河らと共に鑑真に東航を懇請し、自らも帰国しようとする。しかし、難破して安南に漂着。ついに帰国ができなかった人物である。歌は『古今集』に入集するが、仲麻呂は奈良朝・万葉期の人である。

まず、「三笠山の月」について、平城京における三笠山と周囲の位置関係から考えると、桜井満氏が「春日山は標高四九七メートルあり、一方三笠山は標高二八三メートルで、平城京のあたりから東方にまどかな月を望み見ても、三笠の山の月という実感は得られず、『春日の山の月』となってしまう、あくまでも『三笠の山の月』として実感を得るためには、三笠山の麓で月を望まなくてはならない」(5)としているように、詠む為には、地理的關係ではなく、山自体への強い思い入れが必要となっていたといえるであろう。

ここで、三笠山初出の『続日本紀』養老元年二月一日の条、及び宝龜八年二月六日の条をみると、

遣唐使祠神祇於蓋山之南。

(養老元年二月一日)

遣唐使拜天神地祇於春日山下。去年風波不調。不得渡海。使人亦復頻以相替。

(宝龜八年二月六日)

とある。

また、『万葉集』巻一九には、光明皇太后が入唐大使として赴く甥藤原清河に賜った歌と、それに答える清河の歌が載っている。

春日に神を祭る日に、藤原太后の作らす歌一首

即ち入唐大使藤原朝臣清河に賜ふ露凝望遠聲

四四〇大船にま梶し貫きこの我子を唐国へ遣る斎へ神たち

地ではなかったかと憶測するのである。」とし、「同時代の仲麻呂にとっても『三笠の山』はただ都の東に眺められる名山というだけではないのである。」と、安倍氏と三笠山の関係から、仲麻呂の歌に「三笠山」が詠まれた理由について説いておられる(12)。福山敏男氏は

「春日神社の創立と社殿配置」で、この『東大寺要録』の記文は正確なものとは認めたいが、御蓋山のあたりに安倍氏の社があったことは事実かも知れないと、説いておられる(13)。これが事実ならば、確かに、安倍一族には極めて馴染みの深い、縁の地ということになる。

仲麻呂が故郷を懐かしんでの詠歌に「遣唐使としての自分」と「氏族としての自分」の両方に関わりの深い三笠山を歌い込んだことには必然性を感じられるのである。

このように、仲麻呂が三笠山の月を詠む背景には氏神社の存在が推定され、三笠山と月を一首に詠み込むのは仲麻呂固有の感情からであったと考えられる。作歌背景を考える限り、仲麻呂が意識的に三笠山に月を詠んだとは思えない。では、遣唐使ではなく、安倍氏でもない他の人々にとっても、三笠山に月を景物として配する観念は存在していなかったのだろうか。

## 二・『万葉集』の三笠山詠

『万葉集』に三笠山詠歌は一六首存在している。

- A 三三三笠山野辺行く道はききだくも繁荒れたるか久にあらなくに
- B 三三三笠山野辺ゆく道ききだくも荒れにけるかも久にあらなくに
- C 三三春日を春日の山の高座の三笠の山に朝去らず(岑岑)
- D 三三高座の三笠の山に鳴く鳥の止めば継がる恋もするかも
- E 三三雨隠る三笠の山を高みかも月の出で来ぬ夜はふけにつつ
- F 三三待ちかてに我がする月妹が着る三笠の山に隠りてありけり
- G 三三大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ

## 大使藤原朝臣清河の歌一首

四四春日野に斎く三諸の梅の花栄えてあり待て帰り来るまで(6)

『続日本紀』宝龜八年の記事については、早くに小川環樹氏が「三笠の山に出でし月かも」で紹介し、「このとき遣唐副使小野石根らは前年ひとたび出発したが、風波のため吹きもどされたので、『重ねて祭祀を修した』という。これは遣唐使が出かける前にはいつも春日山で神に祈る習慣があったのではないか。」としている(7)。また養老元年の記事及び『万葉集』の和歌については、鈴木靖民氏が「阿部仲麻呂の『天の原』の歌について」の中で、「当時、外交使節を遣わす際の祭祀が多く春日山麓において行われたことは想像できる。」としている(8)。『万葉集』三七二番歌に「春日を春日の山の高座の三笠の山に」とあるように、三笠山は春日山の一峰と考えられていたのだから、巻一九の二首の舞台を三笠山と考えることができるのではないか。これらの点から、遣唐使が渡航に先立ち三笠山で神に祈る習慣があったことが想定できる。遣唐使にとって、三笠山は重要な山であったに違いない。桜井氏は「山上憶良のことだま」において、「奈良時代の遣唐使一行は、三笠山南麓で天神地祇に事の成就を祈願して都を出で立ち、住吉の御津で住吉の神に安全を祈願して船出するのであった」としている(9)。また、同氏は『万葉集』に三首存在する三笠山の月歌のうち、唯一明記されている作者「阿部朝臣虫麻呂」が仲麻呂と同時代の同族であることから、安倍の氏人と三笠山の月との関係について述べ(10)、更に、三笠山には春日神社創建以前に安倍氏神社があり、仲麻呂が帰国の際に思いを馳せたのは氏神社における氏祭りの夜の月を中心にしたものであったと断定されている(11)。この氏神社については、鈴木靖民氏が、『東大寺要録』巻四諸院章に、行基が和銅元年(七〇八)二月に「御笠山安部氏社北、高山半中」に天地院(法蓮寺)を創建したとある記事に注目し、「少なくともこの地が藤原氏によって春日神社が創建されるまでは、阿倍氏に關係を有する

H 三三春日なる三笠の山に月の舟出づみやびをの飲む酒杯に影の見えつつ

- I 三三しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまなく色付きにけり
- J 三三大君の三笠の山の秋黄葉今日のしぐれに散りか過ぎなむ
- K 三三能登川の水底さへに照るまでに三笠の山は咲きにけるかも
- L 三三春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべく

M 三三雁がねの寒く鳴きしゆ春日なる三笠の山は色付きにけり  
N 三三君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる恋もするかも  
O 三三妹待つと三笠の山の山菅の止まずや恋ひむ命死なずは  
P 三三春日なる三笠の山に居る雲を出で見ることに君をしと思ふ

『万葉集』では、三笠山と月を詠んだ歌が四首(E・F・H・L)存在している。全体の一六首からすると、月が三笠山に観念的に固定された景物だとは考えにくい。しかし、印象深かったことは事実として認め得る。

それよりも、これらの歌が、景物というよりは三笠山の円錐形の形そのもの、そして山名に注目して山自体を詠んでいることに気付く。人々がいかにその形を意識していたかが、被せられている枕詞によって窺える。

- ①高座の(C・D) ②大君の(G・J) ③君が着る(N)
- ④妹が着る(F) ⑤雨隠る(E)

③④の「着る」は笠などを被ることをいい、それぞれ「君が被る御笠」「妹が被る御笠」の意である。②は「大君が召される御蓋」の意で、この「蓋」は天皇や貴人が外出する時に、後ろから差しかける天蓋(衣笠)のことであろう。そして①の「高座」は天皇をはじめとする高貴の人が座す所で、他より高くなっている壇を指しており、これは②の天蓋を念頭に置き、「高座の御蓋」の意となる。①②③④は「蓋・笠・傘」を表現しており、同音の地名「三笠山」に被せたと思

われる。また、⑤「雨隠る」も『和歌大辞典』に「雨に降りこめられて家にいる意で、外出に必要な御笠としてかけたか。」とあり、先の四種の枕詞と同じ考えから生じているようである。

これら以外の歌をみると、OP以外は「荒れてしまった野辺を行く道・黄葉・花」と実景を詠んでいる。そして、Oは寄物陳思歌、Pは非別歌で、両者は共通して（おそらく身近な）三笠山の山菅（序詞）・雲によって自らの想いを詠う。しかし、両者は類歌が多く存在していることからいって、三笠山独自の詠法とは言い難いと思う。したがって、いずれも三笠山の実景を詠むことから遠く離れてはいない。『万葉集』の三笠山詠の殆どは美しい円錐形の、実景としての山、またそこに咲く花や黄葉等を詠んでいた。だが、枕詞に着目すると、身近な「カサ」をイメージしており、同音の地名に掛ける表現に特徴があるといえよう。

### 三 八代集の三笠山詠歌とその分類

八代集中に三笠山詠歌は、仲麻呂歌を除くと二五首存在する。（14）  
Aきみがさすみかさの山のもみちばのいろ 神奈月しぐれのあめのそめるなりけり  
（古今）雑体（二〇九）類知（二〇九）

Bそらしらぬ雨にもぬるるわが身かなみかさの山をよそにききつ

Cさしてこと思ひしものをみかさ山かひなく雨のもりにけるかな  
（後撰）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）  
それよりかすがの使いにたてまかりければ（もの女）七五

Dもるめのみあまたみゆればみかさ山しるしるいかがさしてゆくべき  
（後撰）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

E旧里のみかさの山はとほけれど声は昔のうとからぬかな  
（後撰）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）  
（後撰）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Qきみが代はかぎりもあらじみかさやまみねにあさひのささむかぎり  
は  
（金葉）賀部（三〇四）宇治前大臣歌合に採る（大蔵卿）（三〇五）

Rみかさ山かみのしるしのいちしるかありけりとさくぞうれしき  
（金葉）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Sよのなかをおもひないりそみかさやまさしいづる月のすまむかぎり  
は  
（詞花）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）  
（詞花）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Tながらへばおもひでにせむおもひでよきみとみかさのやまのはの  
月  
（詞花）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Uみかさやまさすがににかけにけるかひもなきあめのしたかな  
な  
（詞花）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）  
（詞花）雑（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Vみかさ山さしてきにけりいそのかみふるきみゆきのあとをたづねて  
（千載）二五九首歌（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Wあめのしたのだけかれとやさかさきばをみかさの山にさしはじめけん  
（千載）二五九首歌（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）  
（千載）二五九首歌（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Xしら雲のみねにしもなどかよふらんおなじみかさの山のふもとを  
（新古今）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Yあめのしたみかさの山のかげならでたのむかたなき身とはしらずや  
（新古今）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

以上の和歌を見ても、平安人たちには実景より詞遊びや比喩歌的に三笠山歌を詠んでいる傾向があると思う。

AからYに詠まれている「三笠山」のうち、実景の三笠山以外の意味を含むものが見られ、歌中の三笠山に込められている意味により分類が可能である。分類した結果を表にすると次のようになる。（実景

F声たかくみかさの山ぞよばふなるあめのしたこそたのしかるらし  
（拾遺）賀（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）  
（拾遺）賀（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Gさくら花みかさの山のかげしあれば雪とふれどもぬれじと思ふ  
（拾遺）賀（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Hあやしくもわがぬれぎぬをきたるかなみかさの山をひとにかられて  
（拾遺）賀（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Iみかさやまさしはなれぬといひしかどあめもよにとはおもひしものを  
（後撰）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Jみかさやまかすがのほらのあさぎりにかへりたつらんけさをそこま  
で  
（後撰）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Kふかきうみのちかひはしらずみかさ山心たかくもみえしきみかな  
（後撰）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Lけふまつるみかさの山の神ませばあめのしたにはきみぞさかえん  
（後撰）恋六（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）少将（二〇九）

Mみかさやまひかりをさしていでしよりくらであけぬ秋の夜の月  
（金葉）賀部（三〇四）宇治前大臣歌合に採る（大蔵卿）（三〇五）

Nいかなれば秋はひかりのまさるらむおなじみかさの山のはの月  
（金葉）賀部（三〇四）宇治前大臣歌合に採る（大蔵卿）（三〇五）

Oみかさやまもりくる月のきよければかみのこころもすみやしぬらん  
（金葉）賀部（三〇四）宇治前大臣歌合に採る（大蔵卿）（三〇五）

Pいかばかり神もうれしとみかさやまふた葉のまつのちよのけしきを  
（金葉）賀部（三〇四）宇治前大臣歌合に採る（大蔵卿）（三〇五）

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
I 近衛府の異称		B	H	J	P			X
中將という女房名				I				
II 春日明神を考慮				L	O		W	Y
III 藤原氏を暗示					R	S		
IV 実際の景色としての三笠山	A				N	M	T	
V 詞遊の歌語・三笠山		D	C	G	K	Q		
I カサを暗示 II 比喩								

暗示するものを分類しただけに過ぎないが、八代集における歌語「三笠山」の使用法には大きな流れが感じられる。以下、この分類に従い、それぞれの「三笠山」について、具体的に考えて行きたいと思う。

### 五 「三笠山」の表象するもの

ここでは、表中のI、II、IIIについてみていくことにしたい。  
I. 近衛府について  
『万葉集』には「高座の御蓋・大君の御蓋」の表現があり、天蓋がイメージされていたが、この天皇を覆う御蓋が発展して、平安期には

天皇を警護する近衛府を「三笠山」と呼んだ。『能因歌枕』には「みかさ山、中少将をよめり」、『俊頼髓脳』にも「近衛、三笠の山といふ」とある。ここに分類したうち、B E H J Pは詞書から三笠山が「近衛府の異称」であることが明らかである。以下に詞書を抜粋する。

B 少将さねただ、かよひ侍りける所をさりとて

E 兼輔朝臣、宰相中将より中納言になりて

H おなじ少将かよひ侍りける女に、兵部卿致平のみこまかりて、

少将のきみおはしたりといはせ侍りけるを、

J 二条前太政大臣少将にはべりける時、

P 摂政左大臣中将にて侍りけるころ

また、Xの詞書の「おなじつかさのかみなる人」とは詠歌当時、右近少将の詠者藤原義孝の上官で、右近衛府の大將であった藤原兼家を指す。よって、詞書中の「つかさ」とは近衛を示していることになる。このように、『万葉集』で「天皇の御蓋」と詠まれた三笠山は、あたかも「御蓋」のように天皇をお護りする「近衛の大・中・少将」に對し用いられる歌語となつたのであつた。

同様の異称に「柏木」がある。『枕草子』「花の木ならぬは」の

「柏木、いとをかし。葉守の神のますらむもかしこし。兵衛の督、佐尉などを言ふもをかし。」(15)からも知れるが、柏木もこの木に葉守の神のいらつしやることから守衛の意にとり、「兵衛」の異称として用いられた。柏木に葉守の神が座すことは、『大和物語』六八段に既に著れている。また、同二一段には兵衛の異称として「柏木」を詠む、兵衛の佐時代の良少将と監の命婦との間に交わされた贈答歌がみえる。この「兵衛」を表す柏木と共に、「近衛」としての三笠山を一首に詠み込み、対照させた歌も『馬内侍集』や『道綱母集』に見えている。『萬葉集』兵衛のすけなる人かたらふとみな人ききて後、中将にふみかよはしければ、人のききていひたる

三かしは木は雨も人めもしげしとてみかさの山にふみかよふとか

使かならず立つ。帝、奈良におはしましし時に、鹿島遠しとて、大和国三笠山にふりたてまつりて、春日明神と名づけたてまつりて、今に藤氏の御氏神にて、公家、男・女使たてさせたまひ、后宮・氏大臣・公卿、皆、この明神につかうまつりたまひて、二月、十一月上旬の申の日、御祭にてなむ、さまざまの使たちのしる。藤原氏が氏神として祀る春日明神は、元来常陸国の鹿島神宮の祭神だが、それを三笠山に勧請したのである。それにより、「三笠山」で「春日明神」を暗示できたのである。

また、注目したいことに、ここに分類した歌はいずれも藤原氏によって詠まれている。三笠山の暗示する対象には段階性があり、藤原氏以外が詠む三笠山は「藤原氏一族」となり、当の藤原氏が詠む三笠山はその氏神の「春日の神」となるのではなからうか。つまり、人々が「カサ」として頼み、その蔭に隠れようとするのは藤原氏であり、その藤原氏が頼みをかけるのは氏神である春日明神なのである。これはUYに顕かに著れている。

### III・藤原氏について

これに該当するSUについては具体的に考えたい。Sについて『詞花和歌集全釈』では、「顯輔の官途は……誰人かの讒言によつて悲運を余儀なくされていたが、大治五年(二三〇)崇徳天皇の中宮に、忠通女聖子が立つたに及んでその外祖母の弟たるによつてであるが、中宮亮となつて政界に復帰し、保延元年(二三五)従三位となつて公卿に列したといわれる。……女房に愚痴をこぼしたのも、復帰後間もない頃関白忠通も目立つて顯輔を引き上げようにも、周囲に気兼ねして中々引き上げられなかった頃のことであろう。」(17)と、この歌の背景について述べられている。

表現について詳しくみると、まず気づくのは「月」である。古来、月は中宮を寓するのに使われていた。中宮を月に譬える原因とし

「萬葉集」さねかたの兵衛のすけにあはすべしときき給ひて、少将にておはしけるほどのことなるべし

三かしはぎのもりだにしげくきくものをなかみかさのやまのかひなき

かへし

三かしはぎもみかさのやまもなつなればしげれどあやなひとのしらなく

また、Iは『和泉式部統集』の詞書に「或所に中将とて候ふ人にかたらふ男、いまはいかずと云ひて後に、雨ふる夜いきたりとききて」とあり、詠者の相手が通つた女の女房名「中将」を「みかさやま」と表現している。これは、近衛府の大・中・少将を「三笠山」ということが定着してから派生したものであろう。

このように、三笠山は天蓋の意から、天皇を護る「衛の司・近衛府の異名」として多くの歌に詠まれていった。分類表では『新古今集』に一首存在しているが、詠者藤原義孝はHの詠者と同一人物であり、拾遺集時代の歌人といえることから、この用法は、勅撰集では第二の『後撰集』から第五の『金葉集』に集中してみられるという特徴もある。

### II・春日明神について

ここに分類した六首中四首は神祇歌だが、残る二首は神祇歌とは記されていない。しかし、Oは三笠山に鎮まる神、即ち春日明神に思いを馳せているし、Rも詞書から和歌中の「かみ」を春日明神として差し障りはないと考える。

『大鏡』に藤原氏の氏神・春日明神の由来が書かれている(16)。

その鎌足のおとどまれたまへるは、常陸国なれば、かしこに鹿島といふ所に、氏の御神を住ましめたてまつりたまひて、その御代より今にいたるまで、新しき帝・后・大臣立ちたまふ折は幣の

て考えられる事柄には、次の二つがあると思う。

まず第一は、「天子之与后、猶日之与月」と『礼記』にあることである。「日月」は貴重な光をもたらずものであることから、非常に大切なものの例として用いられた。年代は下がるが、『建礼門院右京大夫集』では、

たかくらの院御位のころ、承安四年などいひしとにや、正月一日中宮の御かたへ、内のうへ、わたらせ給へりし、おほんひきなほしの御すがた、宮の御物のぐめしたりし御さまなどの、いつと申しながら、めもあやにみえさせたまひしを、ものとはよりみまゐらせてころにおもひしこと

二雲のうへにかかる月日のひかりみる身のちぎりさへうれしとぞおもふ

と、高倉天皇と中宮・平徳子を日と月になぞらえ仰ぎみている。

第二には、a遅くも『金葉集』頃までに「月秋」の考えが定着していた(18)。更に、b平安中期以後、東宮を春の宮というのに対し、皇后や后宮を「秋の宮」と称した。「秋の宮」は歌語で、季節は秋を表す。すなわち、后の宮は秋の宮であると同時に、日に対する月である。このことが相乗的に「秋の月」と后の宮の結び付きを高めたのではなからうか。Sでも月は中宮を指し、「三笠山からさしいづる月」とは、まさに「藤原氏から出る中宮」を表しているように思う。当時の中宮は藤原忠通女聖子である。

続いて、さらに違った角度から「月」について考えてみたい。古代人は月を「不死の寿を持つもの」と考えていた。人々は月の満ち欠けを月の死と復活と考えており、月は一度死んでもやがて復活することから「永遠の生を得た存在」と認識されていた(19)。つまり、「三笠山からさしいづる月」の「月」は、不死即ち永遠の生の象徴である。もつと強くいえば、Sにおける「月」は「永遠に続く栄華」の象徴と解せるのではなからうか。「月のすまむかぎり」は永遠を意味する。

(実状としては藤原氏は安泰とはいえないのだが)「これまで同様、これからも藤原家から天皇妃が出る間は(つまり、永遠に)藤原氏は安泰なのですから、心配することは無いのですよ」という意味を含んでいる歌だと思われる。

Uの歌から、私は『伊勢物語』百一段の「咲く花のしたにかくる人を多みありしにまさる藤のかげかも」の歌を思い浮かべた。表向きは大きな藤花の賛美だが、「藤原氏の庇護を蒙る人が多いので、在原氏を差し置いて」と皮肉が込められている。『伊勢物語』では業平らしき人物が皮肉を込めて「庇護を蒙る人が多い」と詠うのに対して、Uでは「三笠山の蔭ならぬ御笠の御蔭を蒙っている私」と、自分を藤原氏の庇護を蒙る者と卑下し、師通の機嫌を直そうとする。ここであらう御笠すなわち三笠山は当然、藤原師通になる。

このように『詞花集』の二首は「三笠山」で「藤原氏」が暗示されている。また、月を詠む歌では意識的に両者を詠み込んでいる。

最後に、表ではここに分類してはいないが、Qをみておきたいと思う。この歌は上句で「君の御代の限りなさ」をいい、下句でその条件節を詠む。その条件とはS同様「永遠」を意味する。ここで問題となるのが「君」である。注釈の多くは、歌合主催者の前太政大臣師実とする。歌合主催者を寿ぐことも確かに重要ではあるが、『古今集』賀歌部の「君」がいずれも「天皇」を指していることや、同じ様な歌体の経信歌「きみがよはつきじとぞおもふかみ風やみもすがはのすまむかざりは」(後述)「春内歌合」には「天皇を寿いでいることを考え合わせると」、「君」は時の帝である堀河天皇を指すと私は考える(20)。帝を寿ぐことは外戚たる師実への寿ぎに繋がり得る。この歌の場合、表立って寿がずとも、裏では師実を寿ぐ要素が見えるのである。それは歌語「朝日」である。『古今集』賀歌部より一首挙げる。

峰たかきかすがの山にいづる日はくもる時なくてはすべらなり

八代集の歌で前述以外の十首は三笠山自体を詠むものだが、月と共に詠むのはMNTの三首で、月の名所の認識があったとするには少なすぎるように思う。

しかし、Mを見ると「月の名所」の意識が窺える。その詞書は「八月十五夜に人人歌よみけるに詠める」である。八月十五夜は仲秋の名月と呼ばれる満月を観賞する日である。しかも詠者は三笠山と縁のない平師季。この歌合の行われた場所が実際にはどこなのか定かでないが、仲秋の名月を観ながらの月の歌に三笠山が詠まれるということには大きな意味がある。当時の人々には「三笠山」月の名所の觀念が生まれていたのではないだろうか。

また、Nは秋の月の美しさを疑問調で詠むが、「同じ三笠の山の端の月」の奥には「春夏秋冬、四季のいつでも三笠の山の端の月は美しく、風情があるが」という感情が込められており、「四季のどれをとっても三笠山の月は素晴らしいが、特に秋の月は美しく澄んでいて素晴らしいよ」と表現している。詞書によると、歌合の題詠歌ということだが、月題で三笠山を詠むというのも三笠山と月との繋がりが意識されていたからこそであろう。

さらに、『金葉集』中四季の月は五十八首存在する(22)が、月を代表する秋の月と組合せて詠まれている地名では、三笠山は三首(異本歌も含めると四首)と、明石と共に最も多い。これも注目値するだろう。

ところで、私撰集、私家集、歌合等の三笠山詠歌をみても、同様に月詠は決して多いとは言えない。ただ分布状況を見ると、平安後期以降に「三笠山と月」の歌は多くなっている(23)。私が思うに「月の名所」のイメージは、この頃定着しつつあったのではなからうか。仮説に過ぎないが、これは先述の阿倍仲麻呂の「天の原」歌の影響ではないかと私は考える。本歌取りの手法と言ってもよいだろう。

事実明かに意識した和歌も存在している。

(吉)賀歌(春宮生まれ生へけし時にまるとめ)典藤原(まの朝臣)三六四  
「いづる日」は生まれた皇子(後の東宮)を太陽に譬える。この歌で春日山が詠まれるのは皇子(保明親王)の母が藤原氏(穩子)であることによるのだろう。このように「いづる日」つまり「朝日」は皇子・東宮を表す。当時堀河天皇にはまだ皇子がなく、皇子誕生はまさに祝であった。Qは皇子誕生の予祝となっているのではないだろうか。師実にしても孫の堀河天皇(堀河天皇の母賢子は源顯房女、師実の養女)に皇子が誕生し、その御代が安泰となれば喜ばしいことであろう。白河天皇退位により即位した孫・堀河天皇を擁しての、摂関政治復活を師実は夢見たかも知れない。そんな師実の大切な「堀河天皇」の治世を無限と表現し、間接的に師実を寿ぐ。そして、堀河天皇自身は実の娘の儲生ではなかったことから、「次の代こそ……」という予祝がこめられ、それは「永久に」と掛けられている。三笠山で藤原氏を暗示することは、当時まだ一般化してはいないであろうが、三笠山に藤原氏の氏神が座することは人口に膾炙していたはずであり、「三笠山」と「朝日」の二つの詞のイメージから「藤原氏腹の皇子」が想像され得る。詞同士が持つイメージを重ね合わせるにより、師実にも祝の心を表していたのである。(21)

三笠山のこの用法で注目したいのは、『詞花集』の二首が藤原氏に對して詠まれているということである。一の「衛りの司」が権力者(天皇)を衛るところから生じたのに対して、この「藤原氏」は権力者(藤原氏)の傘下というところから生まれたのであろう。そしてもう一つ、「三笠山に鎮座する春日明神」を氏神とする氏族であることが、「三笠山」で「藤原氏」を暗示できる、忘れてはならない大切な要件なのである。

## 五、月の名所の意識

いづこにもふりさけいまやみかさ山もろこしかけていづる月かけ

(新勅撰集二五・名所歌合二〇・新十六撰三六)

みかさやまむかしの月をおもひいでてふりさけ見ればみねのしら

ゆき (秋徳月集三五・大和歌抄七五)

もろこしの空もひとつに雲消えて誰か三笠の山のはの月

(全編一七四・家語尊皇歌三七・書五十歌合四三七・歌枕寄八五三)

おもひいづやみかさの山の月かけはもろこしまでもわすれざりけ

(極楽歌集二六)

り  
さしのぼるみかさの山の月影やもろこしまでのしるべなるらん

(白河殿七言八六)

仲麻呂歌自体が心を打つものであり、多くの歌集等に記され、本歌となる機会も多かったのだろう。また、他の三笠山詠歌を本歌とすることも、あったかも知れない。それにより「三笠山といえ月」というイメージが形成されてきたのだと思うのである。

## 六、カサという名(音)に対する意識

五、と関連して、三笠山に月を固定することが早くに定着しなかった理由に、三笠山の「カサ」という語に原因があると私は考える。

『万葉集』所収の「三笠山」詠歌の殆どが「カサ」をイメージしていたが、これは平安期でも受け継がれ、三笠山詠歌の根底には必ず「カサ」が存在し、平安和歌では笠・傘の縁語等を駆使した詠みが多くなっていた。何を詠むかよりも、いかに詠むかに力が注がれた結果といってもいいだろう。

『後撰集』以降の三笠山詠には詞遊び的傾向が見られるが、カサをイメージすることは『万葉集』以来、変わらずに行われた。ここで、三笠山の語を用いてはいないが、紀貫之の三笠山詠歌を挙げたいと思う。



名のみして山は三笠もなかりけりあさ日ゆふ日のさすをいふかも

(遠) 雑下(四六) 雑下(四七)

この歌では、実際の山とイメージの齟齬を詠う。「名のみして」に「カサ」という「名」に注意を払っていたことが窺える。

Gの歌は雑春部に置かれているものである。「京極御息所歌合」の仮名日記(24)によると、延喜二年三月七日、宇多法皇と共に京極御息所(藤原時平女養子)は春日神社に詣でた。大和守藤原忠房が「おほむまうけ」をしたのだが、すばらしく作った竹籠に果物を入れ、歌を書いた色紙をそれに付け、二十の牛車それぞれに入れた。御幸後この二十首への返歌を女房たちに詠ませ、それを左右に分け二十番歌合とした。Gは忠房が献じた二十首(凡河内躬恒歌も八首認められる)中の一首である。西本願寺本『躬恒集』には「法皇六条の御息所かすかにまうつるときに大和守忠房朝臣あひかたらひて、このくにのなのところを倭歌八首よむへきよしかたらふによりて二首おくる、于時延喜廿一年三月七日」とある(25)。「おほむまうけ」が忠房の役目であり、和歌では法皇御幸と春日神社参拝を寿ぐことが必要条件である。そんな大和国のいいところを詠む二十首中にGはあり、ここでの三笠山は「大和国の三笠山」として詠まれる。散る桜の花びらのイメージを雪と表し、「大和国には三笠山という傘があるから濡れることはないでしょう」とする。根底には「傘」があり、実際の山を詠みながらも表現の世界で遊んでいるのである。ここでも貫之歌と同様に「名」の意識が働いている。

Fも同じで、三笠山の「傘」の名から「雨」を連想する。そして、この前歌(『拾遺集』二七三番歌)では「山階の山」が詠まれている。

山しなの山のいはねに松をうゑるときはかきはにいのりつるかな

(拾遺)天曆の冬かど四十なりおほしける時、山しなを金糸帯懸て松をかき集めてまじりて、御幸

この二首は同じ詞書を持ち、共に山階寺での詠であり、山階寺とは

警護する「衛りの司・近衛」、そして三笠山に鎮まる「春日明神」、さらにその神を氏神とし、天皇の外戚の地位を獲得し時の権力者となっていた「藤原氏」を暗示したりと、意味の多様化が図られていた。同じ「蓋」でも、対象となる人物を衛る側と衛られる側のどちらに置くのかで様々な詠法を生み出してきたのである。

また、月の名所の観念も『金葉集』頃にはあらわれてきていた。何の理由も無く、一つの土地に景物を配するはずはなく、三笠山の場合には、太陽や月の光が射すことや、仲麻呂歌の本歌取りにより形作られたかと思われる。万葉期から常に山容、そして名から「カサ」のイメージを絶えることなく抱かれ続けた三笠山は、「カサ」という観念と音に縛られたために、詞遊びの歌に詠歌傾向が偏り、それ故に特定景物との固定が早くには起こらなかったのだろう。

さらに、三笠山は古くは安倍氏、次いで藤原氏との結び付きがみられた山であったが、これにより、詠歌に発展がみられたのは事実である。だが、「カサ」のイメージに縛られていたことと同様に、この「人事との深い繋がり」も、早い時点での「三笠山と景物との固定」を妨げたのではないだろうか。

歌語「三笠山」の意味が多様化され、表象がなされることにより、三笠山は多くの和歌に詠み込まれ、名所歌枕としての地位は築かれた。そして、様々な事柄が絡み合った上で、三笠山は「月の名所」としての認識を得ていったのであった。

注

- (1)『日本歌学大系一』(佐佐木信綱編、風間書房、昭三・三三)所収『能因歌枕』(元禄九年版本)。以下、次に挙げる歌学書の引用も『日本歌学大系』による。『和歌初学抄』『俊成随脳』。
- (2)『日本歴史地名大系30奈良県の地名』(平凡社、一九八・六三)による。

興福寺をいう。初めに山階の地に創られたことから、「厩坂寺」「興福寺」と場所や名称が改まってから後も、「山階寺」といわれたらしい。この山階寺は平城京の最東端に位置し、春日神社の隣にあたる。私は、兼盛歌で詠われた「山階の山」とは、F同様に三笠山のことではないかと考える。山階寺が初めに創られた山階の地の山を詠む必然性は、ここでは無に等しい。ならば、藤原氏の氏寺と氏神社という関係から「山階寺の山」、あるいは「山階寺の後方にある山」の意で「山階の山」と三笠山を表現したのではないだろうか。または山階の語源「山が並んでいる」から、三笠山や香山(高山)を一括して春日山と称するこの山々を「山階の山」といったものか(26)。

ここで、なぜ、このようなことを述べるのかというと、同じ山に対してでも、自分が表現したい内容に適した名称を用いることを示したためである。兼盛歌は「山階の山の岩根」を詠うが、「三笠山」ではどうしても「カサ」のイメージが強すぎるので岩根は不似合いである。三笠山の岩根を詠むものは勅撰集には存在していない。それに対し、「山階の山」なら岩も釣り合わないことはないであろう。(花山、三笠山や高山の総称としての「春日山」の岩根は『後拾遺集』四五二番歌に詠まれている。)やはり三笠山の「カサ」の名が影響していると考えられる。

おわりに

『万葉集』では実景として詠まれたが、「高座の御蓋・大君の御笠」など「カサ」が念頭にあった三笠山詠は、八代集ではそのイメージを受け継ぎながらも、掛詞、縁語等を駆使し二面性を持たせた詞遊び的表現が主となる。『拾遺集』の貫之歌には実景とイメージとの齟齬を詠むことも見えていた。「三笠山」は、その形が美しい円錐形であったために御笠、すなわち「天皇の御蓋」になぞられ、そこから天皇を

- (3)『新編国歌大観一勅撰集編』による。以後、勅撰集和歌及びその他の和歌、詞書の引用は断りがない限り、『新編国歌大観』による。
- (4)『明州』について、小川環樹氏「三笠の山に出でし月かも」(『図書』昭三・九月号・「文学」第三卷第二号に転載)、杉本直次郎氏「阿倍仲麻呂の歌についての問題点」(『文学』第三卷第二号、昭三・二)、鈴木靖氏氏「阿倍仲麻呂の『天の原』の歌について」(『日本歴史』第三五号、昭三・六、吉川弘文館)、平山城児氏「三笠の山に出でし月かも」(『上代文学』三三号、昭三)、桜井満氏「三笠の山の月―阿倍仲麻呂の歌をめぐって―」(『万葉びとの世界』雄山閣、平四・二〇)は、この歌が詠まれたのは明州ではなく、蘇州黄泗浦の揚子江上とする。現在は蘇州説が通説となっている。
- (5)桜井満氏の前掲論文(注4)に同じ。
- (6)『新編日本古典文学全集九・萬葉集④』(小島憲之他校注・訳、小学館、一九八・八二〇)による。以後の『万葉集』所収和歌の引用も『新編日本古典文学全集』によるものとする。
- (7)前掲(注4)の小川氏の論文による。
- (8)前掲(注4)の鈴木氏の論文による。
- (9)「山上憶良のことだま」(『歴史と人物』一九六・二月号)による。
- (10)『古今集』では「安倍仲麻呂」と表記されているが、『国史大事典』「あべうじ」項では「阿倍氏 古代豪族。安倍とも記す。『日本書紀』では孝元天皇の皇子大彦命を祖とするが『古事記』は大彦命の子建沼河別命を祖としている。……」(傍線は私に記す)とある。また、安倍と阿部については、桜井満氏が(注4)の論文の中で「『阿倍』と『安倍』は通用するが、べの音にはいわゆる上代特殊仮名遣の問題がかかわる。すなわち『倍』はべ乙類の音仮名であるが、『阿部』の『部』はべ甲類の訓仮名である。ただし訓仮名であるので、特殊仮名遣の拘束を緩めてみてよいであろう。」としておられるので、同族を指すとしてよいと考える。

- (11) (津4・5)に同じ。  
 (12) (津4・8)に同じ。  
 (13) 『日本歴史』第三号 (日本歴史学会編、吉川弘文館、昭四・六・一)を参考にした。  
 (14) 和歌の下の(一)内の表記は、(歌集/部立/詞書/作者/歌番)を示す。  
 (15) 『枕草子総索引』(松村博司監修、榎原邦彦編集、右文書院、昭四・一・二五再版)中の本文による。  
 (16) 『新編日本古典文学全集』大鏡 (橋健二、加藤静子校注・訳、小学館、一九六・六・二〇)による。  
 (17) 『詞花和歌集全釈』(菅根順之著、笠間書院、昭五・一〇・一)  
 (18) このように断言するのは、八代集の四季のそれぞれの部立における月の歌数による。ここで有吉保氏による統計の一部(『新古今和歌集の研究』藝文閣) (有吉保著、三省堂、昭四・四・二〇)の(二七頁)を引用する。

この表により、四季の中で月は秋に代表されていることは明らかである。

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古今
冬	2	2	4	2	4	2	10	28
秋	8	23	7	21	47	16	36	76
夏	1	8	0	6	5	1	11	16
春	1	3	0	1	2	0	4	16

『後撰集』の秋の月は他の春夏冬と比べて群を抜いているし、『拾遺集』でその歌数は減少しているものの、『後拾遺集』では『後撰集』と同様の数値が出ている。そして『金葉集』では四七首と、『後拾遺集』の二倍に増大している。故に『金葉集』までには「月といえば秋」という観念は十分に成立していたといえよう。

《勅撰集》金葉三・一六〇／新勅撰四四(陽三、陽合三)・一六六(歌枕一八五七・二五九(歌枕一八五七・二七七(名所一〇、新撰三三)／続後撰三八(代二〇九)／続古今四四(秋風抄八、秋風集三四七、歌枕一八六〇)／続拾遺七五(歌枕一八五九)・四三／新後撰三七(大歌合二二八)・五八〇(歌枕一八七三)／玉葉二七三・二七四  
 《私撰集》月詣八二／玄玉三〇／夫木六六・七七五(月清一三五)・八五四(蟬子三、歌枕一八五九)・八五七・七三六(拾遺二七四〇)／金葉初三〇(閑保二二)／櫛葉集五〇・五九・六六／秋風抄八(蟬子四四〇、秋風集三四七、歌枕一八六〇)／秋風集三四七・二〇九／続現葉三四・六八／歌枕名一八四九(歌枕一八五〇)／千首二六〇、後鳥羽四七三・一八五(三三、一七四、陽合一六七、陽合四三、陽合一七、歌枕一五〇・一八五(續拾遺七五五)・一八五九(夫木六六、蟬子三・一八六〇)／秋風抄八、秋風集三四七・一八七三(新撰一五八〇)  
 《私家集》赤染二五〇／江帥九三／周防三三(新撰四四、陽合三三)／六条修一〇(親家一〇)／散木五八(歌枕一八四九・六四)／田多七五(閑保五)／林葉九七・九八〇／重家集二〇／殷大輔三三／西行家二六三／月清集二三五(夫木七七五・三六九)／拾遺一四〇・九六・三五七・五〇〇／壬二一七(書合四三、陽合一七、歌枕一八五三)／拾遺愚三七・二七四(夫木一七三六)／拾遺外一七〇／飛鳥井六二七／後鳥羽四七三・三五三(歌枕一八五〇)／俊成女一七七(閑保一九七)／隆祐三三／閑谷二七／艶詞七／露色五／範宗六五／実材母五三／為家六三〇(夫木六六)／資平一四〇／親清五一三／隣女二五八・六二一／雅有六六・六三〇(夫木六六)／洞院百六〇／早秋・一九七／祝(後撰一七七)／宝治百一五五五《定数歌》洞院百六〇／早秋・一九七／祝(後撰一七七)／俊五社二五〇／月／「山月」／文保百〇「秋」／為家千四三／秋／俊五社二五〇／月／為五社三三三／「こまむかへ」・三七七／月／道家百三三／冬(夫木六六六)／祐茂百五「寄月述懐」／為家百四「嶺月」／為兼鹿咒「月」《歌合》蜷子合三「祝」(夫木八五四、歌枕一八五九)／四条宮二「月」／親子合一九「月」(夫木六六六)／高陽合三「月」(陽一三)／閑白保五「山月」(田多七七五・二二)／山月(夫木六六六)／殿上大三「寄月祝」／右大治一七「月」／文治合五「月」／後京極一〇「祝」／老若合四七「雜」(三集一七三四・陽合一六七)／千五百二六「祝」(後鳥羽四七三、歌枕一八五〇)／春

- (19) 『日本民俗文化大系二 太陽と月―古代人の宇宙観と死生観―』谷川健一他著、小学館、昭六)を参考にした。  
 (20) 『後二條師通と大江匡房』(木本好信著、『山形県立米沢女子短期大学紀要』第三号、昭六・三・二八)によると、匡房が師実に対して必ずしも良い感情を抱いていなかったであろうことが窺えるが、個人的にはそういった関係があっても、作品(和歌)からストリートに読むべきことではあるまい。

(21) 本論からは外れるが、Qと歌体の似たものは多く、賀歌では常套的なものであったらしい。参考までに載せておく。

きみが世は限もあらじながはまのまさこのかずはよみつくすとも

(吉集)大歌所歌・神皇正統記(一〇八〇)の(一〇八五)は、仁和寺の(一〇八五)の歌

君がよはかぎりもあらじはまつばきふたたびいろはあらたまるとも

(後拾遺集)賀聖知(陽不知四三)

きみがよはつきじとぞおもふかみ風やみもすがはのすまむかぎり

(後拾遺集)賀聖知(陽不知四三)

君が代はひさしかるべしわたらひやいすずの河の流れたえせで

(新古今集)賀聖知(陽不知四三)

君がよはつきじとぞおもふ春の日の御笠の山にささむかぎり

(永祿集)賀聖知(陽不知四三)

君が代はかぎりもあらじ月影のみかさの山にささんかぎり

(殿上人歌合)大治五年(賀聖知)賀聖知(陽不知四三)

(22) 有吉氏の前提の統計を参照。

(23) 『新編国歌大観』CD-ROMにより検索した「三笠山・月」の組合せを持つ歌の所収歌集及び歌番号を以下に挙げる。但し、本論で取り上げた『万葉集』、八代集所収歌が私撰集、私家集にも掲出されている場合にはこれを省略する。なお、名称は『新編国歌大観』の略称に従うものとする。また、歌合歌、定数歌については「」内に題を示した。

日合三「曉月」・三「曉月」／家隆合一六七「雜」(三集一七三四、書合四七)／名所月一「名所月」・一〇「名所月」(新撰三七、新撰三〇一四)／名所月一・五「名所月」・三五「名所月」・六〇「名所月」／影供建三七「名所月」・三〇「名所月」／大歌合二八(新撰三七)／文八合四九「初昇月」・五「初昇月」・六「初昇月」(陽合二〇)／月十首三七「月前祝言」・二六「月前祝言」・三三「月前祝言」・三四「月前祝言」・三六「月前祝言」／内建八三「山曉月」／新三撰三三八(新撰三七、七、名所月一〇)／白七百二六「海路月」／法華歌四「詠解脱一切 障円鏡智相 応和歌」／龜七百三三「社頭月」  
 《日記》竹むき 三九 《歌論》袋草紙 五五七  
 《物語》浜松三〇／有明別三〇／松浦宮三(陽合五九四)  
 (24) 『新編国歌大観五』所収の陽明文庫本を参照した。  
 (25) 『私家集大成一 中古一』(和歌史研究会編、明治書院)による。  
 (26) 『続日本紀』第一、仁明天皇嘉祥二年三月二六日条(『新訂増補國史大系3』黒板勝美他編、吉川弘文館、昭四・八・三〇)に、興福寺の僧らが仁明天皇四十の賀に長歌を奉ったとあり、その長歌を記す。その中で「旅人三宿春日丸山階」佛聖(奉獻アリ) (送り仮名は私が片仮名に改めた)の表現があり、山階寺(興福寺)の僧を「春日丸山階」佛聖」とする。ここから、「春日丸山階」即ち「春日にある山階(寺)」と表現していたことがわかる。